

第1節 受験の基本

- | |
|------------------------------------|
| (1) 国公立型の7科目受験が基本 —はじめから少数科目に絞らない— |
| (2) 受験は団体戦 |
| (3) 早期に高い目標を持ち、それを貫く |
| (4) 勉強と部活は同時並行—3年部活引退後では受験は手遅れ— |

(1) 国公立型の7科目受験が基本 —はじめから少数科目に絞らない—

私立大学・国公立大学受験にかかわらず、7科目受験の準備をするのが受験の基本である。

その第1の理由は、可能性を広げるためである。新川生の場合、3年生で初めて受験する5月の全統マーク模試からセンター試験本番までに、平均で150点、最大で300点得点が伸びる。本気で勉強すると予想以上に学力を伸ばす生徒が多いのである。2年生あるいは3年生の夏前といった、本格的に学力が伸び出す前に、努力を本気でする前に、自分の可能性をあきらめてしまったのでは、あまりにももったいない。

7科目受験を続ける第2の理由は、そのほうが結局全体的な学力がアップするからである。近年の傾向として、教育系・医療系を目指す生徒の中に学力を伸ばしきれない生徒が多い。前述のとおり、平均で得点の伸びは150点程度だが、国公立大学に合格する生徒たちが200点前後伸びるのに対し、100点以下の伸びにとどまる生徒が教育・医療系志望者には多くみられる。その原因はどのようなものだろうか。

教育系（北海道教育大学など）の場合は2月の2次試験（大学個別試験）で課される小論文対策に時間を取られるため、他系統の生徒よりも受験主要科目の学習が足りていないことが差がつく理由の一つであると考えられる。

一方医療系の場合は、受験勉強開始初期の学力の伸びの鈍さから弱気になって、志望校を落としてセンター試験の科目数が少ない大学を目指し、結局そこに到達する学力すら身につけられないという残念な結果になるパターン5が見受けられる。

勉強は相互に結びついたものである。例えば、英語だけができて、地理や世界史が分からなければ英文の題材の理解度は低いものになってしまう。反対に、多くの周辺知識があれば英語の理解はたやすい。さまざまな科目がある一定レベルに達すると、加速的に学力が上がる時期がやってくる。伸び悩んで、一気に伸びて、また伸び悩んだあとで大きく伸びる、といったサイクルを通して学力は伸びていくものである。このような観点から、早期に少数科目に絞りすぎるのはあまり賢明ではないと言える。

7科目受験を勧める第3の理由は、就職してから差がつくからである。企業の就職担当者によれば、30代・40代で管理職になると、関東の有名私大を卒業した学生より地方の国立大学卒業生のほうが伸びていくケースがよくあるという。3科目程度の少数科目に絞って受験してきた学生は7科目受験組に比べて知識の幅が狭く、それが仕事をするうえでの差を生むのではないかというのがその分析の趣旨であった。

これは私大進学を否定しているのではない。私大に進むにしても、国公立受験組と同じ7科目受験のつもりで準備をしておいたほうが賢明であろうということである。

もう少し広げて言えば、学校の科目で手を抜いてよい科目はないということである。英数国のセンター試験の出題範囲は100%が高校1・2年の学習内容である。入試制度は、君たちの親の世代のころよりずっと普通の学習を重視したものになっているということを覚えておいてほしい。

新川高校よりも少し上のレベルの高校は、センター試験受験者はほぼ全員が7科目受験である。

(2) 受験は団体戦

3年生になると、授業の真剣度がより一層増すのに加えて、講習が64日（放課後10日程合計40日＋夏期講習・冬期講習の前期・後期日程合計24日）開講され、さらに模試が学校実施分だけで例年11

回ある。マーク模試にいたっては金曜日から土曜日にかけて2日間がかりだ。自分で受験勉強を進めながらこれだけの内容をこなすのは、並大抵のことではない。

しかし、仲間がいると乗り越えることができる。学校に通うことのメリットは仲間がいることだ。授業にも講習にも一丸となって取り組み、土曜日もみんなで模試を受け、競い合う。模試は第1志望をあきらめるために受けるのではない。「合格率が低い」という意味のE判定やD判定が出て、友人同士で励ましあって最後までがんばる。そういう集団になると相乗効果で学年全体の学力が大きく伸びる。

受験は生徒も先生も含めた『団体戦』だ。生徒が頑張ると先生も頑張り、やがて自分一人では不可能かもしれない素晴らしい結果を得られることがある。3月の国公立の後期試験まで団体戦を貫こう。

(3) 早期に高い目標を持ち、それを貫く

大学受験では「勉強にかけた時間」が物を言う。高校受験のように、「中3になってから塾通いして合格」「自分は頭がいいから大丈夫」などと考えていたら大間違いで、時間切れに泣く結果になる。

さらに、高校1・2年で夢を持ち、高い目標を保って授業を受けた人と、そうではなかった人には大きな差がつく。そのため「志望校を早めに決める」ことが重要になる。

志望校決定時期と合否の相関を調べた調査によると、高2の秋までに志望校を決めていれば第1志望合格率は85%と高率になる。しかし、決定が高2の終わりから高3の春にずれ込むと合格率は一気に65%まで低下し、それ以降では極めて厳しい数字になる。高2の秋から遅くとも冬にかけてが勝負だということはこの数字は物語っている。

こういったデータを踏まえて、新川高校では1年生で「志望分野宣言」、2年生で「第1志望宣言」を作成し、目標を早く絞り込むという方策をとっている。

志望校を決めるときには、自分の力を勝手に自分で見限って低いレベルに落とさないことが重要である。「偏差値的に入れる大学に進む」という発想の人は自分に妥協しがちで、伸びずに右肩下がりで失敗する傾向が見られる。受験勉強は目標と自分の今の実力の「距離を縮める」「差を埋める」勉強にほかならない。自分に合った勉強の仕方を自分で開発していくところに価値がある。この力は、将来問題に直面したときに自分で考え抜いて解決する力につながるから、苦しくても安易な方向には流れないようにしよう。

中学時代あるいは高校入学早々に志望大学を定めた人たちが、是非合格しようといううちから対策を始めるのが、旧帝大など2次試験重視の大学である。1・2年の学習は授業中心でしっかり身につけているのでセンター試験では差がつかず、知識よりは思考力を求められる2次試験の勝負になる。おのずと受験ではセンター試験よりも2次試験が重視される得点配分になる。

<旧帝国大学・難関大>	2次試験（記述）重視	<各地の国立大学>	センター試験重視
東京大学、京都大学、 一橋大学、大阪大学、 九州大学、名古屋大学、 東北大学、北海道大学 等	センター：2次 東大 110：440 北大（法） 300：450	小樽商科大学、 北海道教育大学、 室蘭工業大学 など多くの大学	センター：2次 小樽商大 900：500 道教育大 900：400 等

大変な努力を重ねて難関大学に入ることのメリットはどのようなものなのか、自分はどのような進路に進むのがよいのか、自分の将来に責任を持って調べるのは生徒各自の仕事である。

(4) 勉強と部活は同時並行ー3年部活引退後では受験は手遅れー

簡単に言って、国公立大学の一般入試には1月のセンター試験（4択マーク式）と、2月の2次試験（大学個別試験・記述試験）がある。ポイントは、繰り返しになるが、「センター試験の英数国は、1・2年の教科書からの出題が100%である」ということである。

したがって、2年生後半か受験生と呼ばれる3年になってから受験勉強を意識した人の場合、センターの試験範囲である1・2年の授業はほぼ終わっているので手遅れになってしまい、第1志望合格はおぼつかないということが容易に想像つく。「3年夏にやっと始めた受験勉強では復習しなおすロスが生じ、センター試験対策すら間に合わない」といった事態は絶対に避けたい。

(4) 受験校の決定

近年の受験人口の減少により、一部難関校を除き国公立大学の門は広がってきている。つまり**文系6教科7科目、理系5教科7科目**をセンター試験において諦めずに受験すれば、国公立大学への道が開けてくるということである。また、進学先を道内に限定せずに、道外を視野に入れると更に選択の幅が広がる。

① 前期・中期・後期 各日程で受験校を決める

基本は「現役で合格を1つは必ず勝ち取る」ように受験校を組むことである。天災など全く予期せぬ要因によって家計が影響を受けても進路は必ず確保できるようにしておくのが得策であることは言うまでもない。仮に浪人するとしても現役で合格しておく、「1年後には絶対にそれ以上の合格を勝ち取らなければならないと自分にプレッシャーをかけることができて良い」(卒業生 談) ようである。

文系の場合、北大以上のレベルの大学を受験する場合は、後期試験はセンター試験の得点のみで合否が決まる大学を確保し、前期で志望校に挑戦することが多い。(合否判定はAが良く、Eは望み薄である。)

[前期：北大C判定、中期：高崎経済大A判定、後期：小樽商大A判定]

小樽商大が第1志望の場合は、センター試験の得点だけで後期合格大学を確保することは難しくなるので、中期日程(公立大のみ)で合格先を確保して、次のようなパターンが考えられる。

[前期：小樽商大C判定、中期：釧路公立大B判定、後期：山形大学C判定]

いずれにしても、センター試験でできるだけ得点を伸ばしておく、後が楽である。

前期日程では「第1志望を貫く」、「D判定ぐらいで合格は厳しいかもしれないけれどもどうしても進学したい大学を受験する」、あるいは「冒険する」ことが多い。現役生はCどころかE判定であっても大逆転して合格することがある。平成23年度入試でもE判定からの合格者が複数名いる。本気でいきたい大学合格のためには本気で勉強するので、1月から2月の「直前ゼミ」(受験先別講習)で記述力を伸ばして、大逆転をする現役生が毎年出てくるのである。ただし、この場合、必ず中期か後期で合格先を確保しておかなければ、ただの無謀な受験になってしまうので、注意が必要である。

後期日程は、前期で第1志望に合格した生徒が抜けるので、実際に試験を受けに来る生徒は半分以下になって、受験場は閑散としているというのが実態である。したがって、たとえ倍率が高かろうとも、合否判定が悪かろうとも、2月25日の前期日程試験後すぐに後期日程の受験対策を積み合格の可能性は高まると考えてよい。毎年、後期日程試験日の3月12日直前まで、受験生は学校で個別指導を受けて試験に臨んでいる。仮に浪人しても伸びるのは、こうして後期の最後まで努力を続けた生徒たちである。

② 道外大学も視野に入れて受験校群を決めておく

以下に文系・理系から進学希望の多い学系を例にとり、具体的にどのように受験校を決定していけばよいかを見てみよう。

i. 経済学系

大学名	センター試験 目標点	合格者平均 偏差値(記述力)
北海道大 経済	710	63
↓ 千葉大 経済	700	60
↓ 金沢大 経済	680	59
↓ 岩手大 法学・経済	650	57
↓ 埼玉大 経済	640	56
小樽商大 商	640	54
↓ 新潟大 経済	610	53
↓ 弘前大 経営経済	600	51
↓ 山形大 法経政策	600	49
釧路公立大 経済	590	49

※「センター目標点」

=B判定得点の目安得点
ただし、この値は年度ごとに
変化するので注意が必要。

※「合格者平均偏差値」

=秋の記述模試の偏差値。

※ 釧路公立大がセンター試験で
課される科目は他大学より少
いので実際にはもう少し難易
は下がる。

本校生徒にも非常に人気のある北大・経と小樽商大・商の間にはセンター得点で70点、2次偏差値で9ポイントの差がある。道内だけを視野に置き、受験校を決定しようとするセンター試験で北大にあと少しで届かない得点だった場合、後期で十分合格可能な小樽商大の前期を受験することになる。しかし、目を道外へ転じれば、実力相応な大学が間にあることが上の表から見て取ることができる。

また、センター試験が小樽商大の目標点までとわずかという結果に終わった場合も同様で、特に東北地区に挑戦可能な大学があることがわかる。

科目数が少ないことを理由に安易に受験校を決めず、最後まで粘って6教科を受験し、道外に出ることも考慮に入れれば、就職にも実績をもつ国公立大学への進学が見えてくる。

以上のことをよく考え、しっかりと受験校を決定することを望みたい。

※小樽商大を第1志望としている生徒が理科2科目受験の理系パターンでセンター試験を受験してしまうと、地歴・公民それぞれ1科目を課す他大学の経済系学部を受験できなくなる。小樽商大の理系型受験は、もともと理系だった者が文転した場合の緊急避難的なものと押さえる方が無難である。本来経済・商学系進学を考えるなら、地歴・公民2科目の受験をしておいて、センター試験後にレベルが上の大学へも下の大学へも志願変更できるようにして、自分の進みたい学問分野のある大学の合格を確保してほしい。

ii 工学系

次に理系でも進学者が多い工学系についてみてみよう。例として、機械工学系をとりあげる。

大学名	センター試験 目標点	合格者平均 偏差値(記述力)
北海道大 情エレ	700	59
↓ 埼玉大 機械工	680	53
金沢大 機械工学類	670	56
電気通信大 知能機械工	630	55
新潟大 機械シス工	620	52
弘前大 知能機械工	565	47
岩手大 機械シス工	555	-
↓ 山形大 機械シス工	530	45
室蘭工業大 機械航空創造	500	-
北見工業大 機械・社会環	470	44

※「センター目標点」
「合格者平均偏差値」は
経済学系と同じ。
※ 岩手大・室工大の合格者
平均SSはデータなし。

上記の表から分かるように、進学先を道内に限定した場合、北大とその他の大学の差が大変大きいことがわかる。しかし、道外に目を向けるとその間に挑戦可能な国公立大学が数多くあることがわかる。さらに、表には載せていないが群馬大・茨城大・秋田大など他にも北大と室工大・北見工大との間に大学が存在する。

ぜひ道外にも目を向けてほしい。また、センター目標点を見てもわかるように、特に理系においては、センター試験の5教科7科目受験を避けなければ、かなり入りやすい国公立大学が存在する。このことを頭にいれて今後の受験勉強にあたってほしい。

もう一度確認しよう。受験先を絞り込む際に注意するのは以下の2点である。

- | |
|--|
| <p>① 前期・中期・後期 各日程で受験校を決める</p> <p>② 道外大学も視野に入れて受験校群を決めておく</p> |
|--|

新川生の道外受験状況はこの新樹の「データ編 第5節 道外大学にも目を向けよう」に掲載してある。道外大学に進学するにあたっての資金計画は「第8章 受験の経済学」も読んでおこう。